

# 1920年代初頭のハンガリー系亡命者と中央ヨーロッパ政治情勢

——『ウィーン・ハンガリー新聞』の動向を中心に——

辻河 典子

はじめに

第一次世界大戦末期から1920年代初頭にかけての中央ヨーロッパ<sup>(1)</sup>では、帝國的な地域秩序が解体し、国民国家が分立する新たな国際秩序がパリ講和会議主体で形成された。ハンガリーは第一次世界大戦末期の1918年10月に共和主義的な革命(本稿では同革命の参加者の呼称に従って「十月革命」と表記する)が、1919年3月に共産主義革命である評議会革命が起こった。同年8月に評議会革命政権が崩壊した後、同年秋からはパリ講和会議の承認の下で旧海軍提督ホルティ・ミクローシュ(Horthy Miklós)を実質的な最高権力者とする反革命的な政治体制が成立する。ハンガリーに対する第一次世界大戦の講和条約であるトリアノン条約の調印(1920年6月)とその批准完了(1921年7月)を経て、ホルティ体制は1920年代半ばにかけて権威主義的な政治体制へと確立していく。

また、第一次世界大戦後の歴史的領土の解体により、戦間期のハンガリー政治では領土修正が主要な外交課題となった。第一次世界大戦後に旧ハンガリー領を領土に収めて形成された諸国家、特にチェコスロヴァキア、ルーマニア、ユーゴスラヴィアにとって、ハンガリー側からの領土修正に繋がる政治工作は脅威であった。同時に、1917年のロシア革命で政権を獲得したボリシェヴィキは1920年代初頭まで世界革命の理想を維持しており、各国の当局が共産主義者に対する警戒を示していた。このため、1920年代初頭のチェコスロヴァキア、特にスロヴァキアでは、ハンガリー政府寄りの領土修正主義的な政治宣伝活動とハンガリー系共産主義者の活動の両方に対して警戒が強まり、両者への警戒が合わさる形で取り締まりが行われることもあった。

本稿では、こうした中央ヨーロッパの政治情勢がハンガリーでの1918-19年の一連の革命に携わった左派系の政治家や知識人の亡命政治活動に与えた影響について、『ウィーン・ハンガリー新聞(Bécsi Magyar Újság)』編集部の1920年から1921年前半にかけての動向に注目して議論する。同紙はウィーンで1919年10月31日から1923年12月16日まで発行

(1) 本稿での「中央ヨーロッパ」とはハプスブルク帝国の継承諸国の中でも、ハンガリーならびに旧ハンガリー王国領を含むチェコスロヴァキア、ルーマニア、ユーゴスラヴィアの三カ国とオーストリアを念頭に置いている。

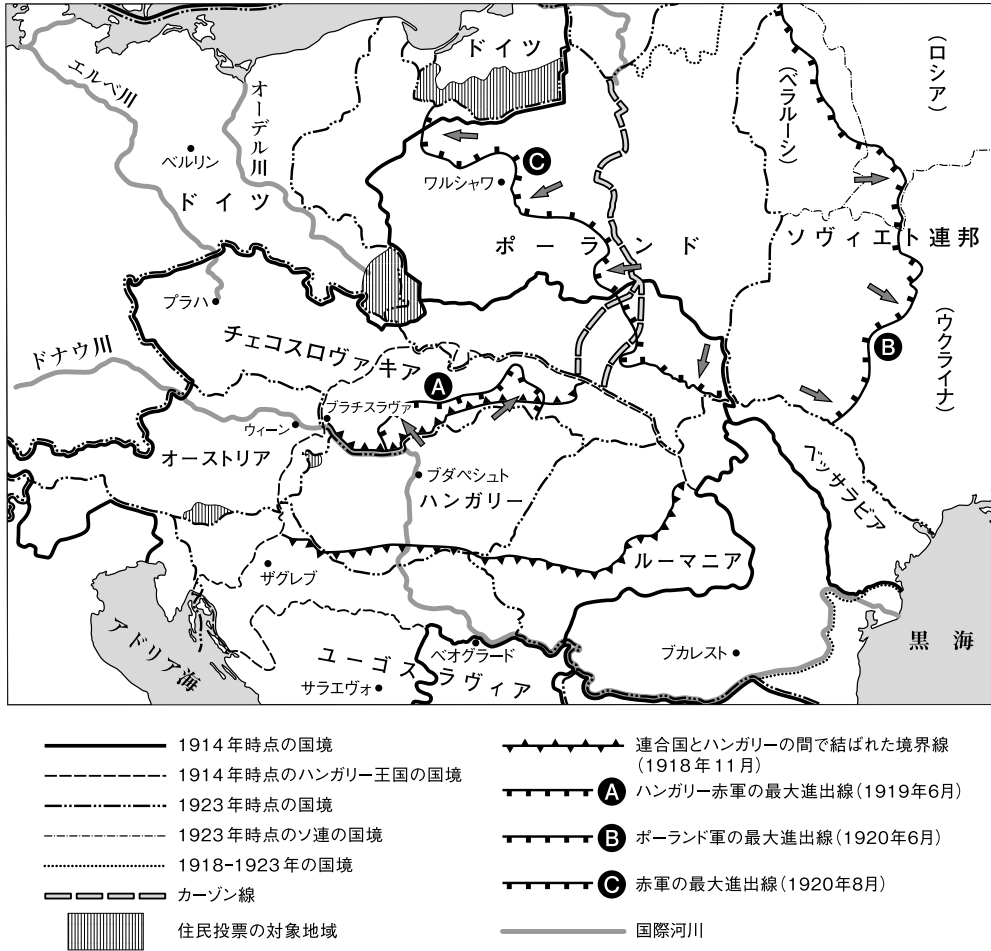


図 第一次世界大戦後の中央ヨーロッパ(1918-1923年)<sup>(2)</sup>

されたハンガリー語日刊紙である。同紙は1920年2月からは親共産主義派の亡命ハンガリー系知識人が編集を主導し、ウィーンを拠点とした主要なハンガリー語論説紙の一つとなった。1920年後半の同紙は、株式の買収工作を通じたウィーンのハンガリー大使館からの働きかけや、「ホルティ＝共産主義者の印刷物」であることを理由としたチェコスロヴァキアでの流通禁止処分<sup>(3)</sup>に直面した。また、「十月革命」で成立したカーロイ・ミハイイ(Károlyi Mihály)政権(1918年10月31日～1919年3月21日)に参加した政治家や知識人は、1919年秋以降に反ホルティ路線の亡命政治活動を展開する。1920年夏には、彼らは同紙を

(2) “Picture 38: East Central Europe, 1918-1923,” in Paul Robert Magocsi, *Historical Atlas of Central Europe* (History of East Central Europe, vol. 1), rev. ed. (Seattle: University of Washington Press, 2002), p. 126より筆者作成。

(3) “631. Jászi Oszkár Károlyi Mihályhoz (Bécs, 1920. december 14.),” in Litván György, ed., *Károlyi Mihály levelezése I. 1905-1920* (Budapest: Akadémiai Kiadó, 1978), pp. 729-731.

重要な拠点として位置づけるようになった<sup>(4)</sup>。カーロイ政権で少数民族大臣を務めたヤーシ・オスカル(Jászi Oszkár)は、1919年秋以降にカーロイの意向を受けながら「十月革命」への参加経験を有する亡命政治家・知識人をウィーンで実質的に束ねる役割を担った。彼は1920年末の『ウィーン・ハンガリー新聞』の流通禁止処分を契機に同紙編集部への関与を強め、1921年6月に同紙の編集と所有の両方で主導権を委譲された。彼は間もなく親共産主義派の知識人を編集部から排除し、同紙を「十月革命」派の主張を発信する媒体として廃刊まで利用した。こうして1920-21年の中央ヨーロッパの政治情勢により、『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集方針、そしてハンガリーからの亡命左派政治家・知識人の政治活動は大きな転機を迎えた<sup>(5)</sup>。

『ウィーン・ハンガリー新聞』の刊行期間は編集方針に従って、親ハンガリー政府路線とも解釈される独立紙路線の時期(1919年10月31日～1920年2月初頭)、ガーボル・アンド

(4) 「十月革命」に参加した亡命政治家には、カーロイの他、彼が率いた旧「独立と四八年党」(通称カーロイ党)のホック・ヤーノシュ(Hock János)、「(市民)急進主義」を掲げた議会外政党(実質的には知識人サークル)の旧全国市民急進党のヤーシ・オスカル(Jászi Oszkár)とセンデ・パール(Szende Pál)、社会民主党では右派のガラム・エルネー(Garami Ernő)のように評議会共和国権に参加しなかった者、中央派のクンフィ・ジグモンド(Kunfi Zsigmond)やベーム・ヴィルモシュ(Bóhm Vilmos)のように評議会共和国権に参加した者、更には「十月革命」政権を途中で離れた旧カーロイ党右派のロヴァーシ・マルトン(Lovász Márton)らも含まれ、反ホルティかつ非共産党員という点以外では政治的に多様であった。なお、本稿ではハンガリー系の人物について姓・名の順に記す。

地名は現在の表記を優先し、必要に応じて他言語の読みを併記する。特に「ブラチスラヴァ」の名称は、1919年初頭のチェコスロヴァキア軍のスロヴァキア進駐後に公式に採用されたものであり、それまではドイツ語で「プレスブルク(Pressburg)」、ハンガリー語で「ポジョニ(Pozsony)」、スロヴァキア語で「プレシュポロク(Prešporok)」等の呼称が併用されていた(中でもハンガリー語の「ポジョニ」は現在でも使用されている)。チェコスロヴァキア建国期の同市の改名に関してはPeter Bugge, “The Making of a Slovak City: The Czechoslovak Renaming of Pressburg/ Pozsony/ Prešporok, 1918-19,” *Austrian History Yearbook* 35 (2004), pp. 205-227や長興進「ブラチスラヴァ地名考」鈴木健夫編『越境』世界の諸相：歴史と現在』早稲田大学出版部、2013年、108-132頁などに、その改名の背景にある戦間期スロヴァキア内での同市の政治的位置づけをめぐる諸問題に関しては、Lubomír Lipták, “Bratislava as the Capital of Slovakia,” in Lubomír Lipták, ed., *Changes of Changes: Society and Politics in Slovakia in the 20th Century* (Bratislava: Academic Electronic Press, 2002), pp. 95-114や香坂直樹「スロヴァキアの『首都』をめぐる戦間期の議論：フェドル・ルッペルトの中心都市論を手掛かりに」『スラブ研究』57号、2010年、123-156頁などに詳しい。

(5) なお、筆者はウィーンを拠点とした「十月革命」派のハンガリー系亡命者の政治活動について既にいくつか議論している。拙稿「ヤーシ・オスカールの1920年代初頭における地域再編構想：『ドナウ文化同盟』(1921年)を手がかりに」『ヨーロッパ研究』8号、2009年、62-81頁は、『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集と経営の主導権を獲得した後にヤーシが同紙に掲載した中央ヨーロッパの地域再編構想を扱った。ただし、ヤーシ個人の政治理論に注目したため、彼の提案への反響については言及できなかった。また、拙稿『亡命者』によるパリ講和会議主導の中・東欧国際体制への対案：ペーチでのユーゴ軍占領継続要求運動をめぐる(1919-1921年)』『東欧史研究』35号、2013年、61-77頁で、第一次世界大戦後のベオグラード軍事協定にもとづいてセルビア軍が占領した後にトリアノン条約でハンガリーへの帰属が定められたペーチとその周辺地域をめぐる、ペーチの左派系政治家とカーロイたち「十月革命」派が共産主義とも権威主義的な政治体制とも異なる左派の立場からハンガリー政府から自立した政治機関の形成を試み、それを通じてパリ講和会議主導で形成されつつあった中・東欧の国際体制への対案を提示しようとしていたことを明らかにした。本稿が扱う時期は同論文で議論の対象とした期間とほぼ重なり、二つの論文によってウィーンを拠点とした「十月革命」派の亡命者による政治活動を多角的に考察することが可能となる。

ル(Gábor Andor)ら親共産主義派が主導した反ホルティ路線の時期(1920年2月～1921年初頭)、ヤーシ・オスカルら「十月革命」派による反ホルティ路線の時期(1921年6月～1923年12月16日)に三分される。同紙をめぐる先行研究は、同紙の編集部に属した政治家や知識人の回顧録での言及の他、ハンガリー史研究の枠内で、同紙の特徴を考察した研究と同紙に携わった政治家・知識人の活動の場として言及する研究に大別される。回顧録で同紙に言及した人物としては、フランク・ラースロー(Frank László)やベレニ・ジェルジ(Böloni György)がいる<sup>(6)</sup>。フランクは1920年5月にウィーンに亡命した後にガーボルが主導する『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部に参加し、ヤーシが編集部の主導権を掌握した後の1921年秋頃まで同紙に携わった。彼の回顧録では、ガーボルらによる反ホルティ路線の時期の『ウィーン・ハンガリー新聞』について編集部内の視点で詳述されており、本稿でも参照する。ベレニは1919年秋にハンガリーから亡命した後に『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集に参加し、1921年6月の編集体制の変更以後は1923年1月末まで編集長代理を務めた。彼の回顧録ではガーボルならびにヤーシが編集部を主導した時期の『ウィーン・ハンガリー新聞』が言及されている。その中では、ヨーロッパで形成された「反動」の支援の下で反革命的な体制がハンガリー国内で機能するようになる状況に対して、ヤーシが同紙の政治的指導者となったことで編集方針が大幅に変更されたことが語られる<sup>(7)</sup>。但し、フランクに比べるとその言及は少なく、ハンガリーから亡命した政治家や知識人が革命理念の継続を求めている点に注目している。

『ウィーン・ハンガリー新聞』の特徴を考察した研究としては、マルコヴィチ・ジェルジ(Markovics György)やゾルターン・ペーテル(Zoltán Péter)の研究がある。マルコヴィチは、1918-19年の一連の革命が倒れた後にハンガリーから亡命した共産主義者や社会主義者による出版物について、1960年代から1970年代にかけて論じ、『ウィーン・ハンガリー新聞』も取り上げた<sup>(8)</sup>。但し、彼は各年ごとに区切って同紙に掲載された多様な記事を紹介しており、ガーボルらの編集部からの離脱への言及は見られるが<sup>(9)</sup>、1920年後半から1921年前半にかけての編集部をめぐる諸問題には踏み込んでいない。ペーテルは出版史・知識史の観点から『ウィーン・ハンガリー新聞』を論じたが<sup>(10)</sup>、彼も編集部をめぐる諸問題やその背景となった政治情勢には言及していない。また、『ウィーン・ハンガリー新聞』に携わっ

(6) Frank László, *Café Atlantis* (Budapest: Gondolat, 1963), pp. 53-109; Böloni György, “A Bécsi Magyar Újság” (Kézirat, 1924. dec.), in *Friss szemmel* (Budapest: Szépirodalmi Könyvkiadó, 1968), pp. 377-379.

(7) *Ibid.*, p. 379.

(8) Markovics György, “A Bécsi Magyar Újság 1919. október-1923. december,” *Magyar könyvszemle* 93, no. 3 (1977), pp. 257-269.

(9) *Ibid.*, p. 267.

(10) Zoltán Péter, “Stellungen und Stellungnahmen: Die Rolle der Wiener Ungarische Zeitung und ihr intellektuelles Umfeld (1919-1923),” *Kakanien revisited* (December 29, 2005) [<http://www.kakanien.ac.at/beitr/fallstudie/ZPeter1.pdf>] (URLは、2013年9月2日現在有効。以下URLについては同様).

た政治家・知識人の活動の場として同紙に言及する例としては、リトヴァーン・ジェルジ (Litván György) による1960年代末から2000年代初頭までの一連のヤーシ・オスカル研究の中での言及が代表的である<sup>(11)</sup>。彼は1921年6月の同紙の編集体制の変更をヤーシの視点から論じたが<sup>(12)</sup>、その契機となった1920年末の流通禁止処分に至る政治的背景への言及は十分ではない。

以上のように、先行研究では1921年6月の『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集体制の変更に至る背景を編集部内の動向に注目する傾向にあり、流通禁止処分に至る同時期の中央ヨーロッパの政治的文脈に位置づけた議論は十分ではない。そこで本稿では、1920年から1921年前半、すなわちガーボルらによる反ホルティ路線の時期からヤーシらによる反ホルティ路線の時期に移行する期間の『ウィーン・ハンガリー新聞』に注目する。

もちろん、この時期のハンガリー語の論説紙が当時の国際的な政治情勢の影響を受けた例は『ウィーン・ハンガリー新聞』に限らないが、同紙は、第一次世界大戦後の中央ヨーロッパの政治変動の影響を受けながら、所有権は複雑に推移し、編集方針は親ハンガリー政府路線とも解釈される創刊当初の独立紙路線から共産主義寄りの反ホルティ路線、そして「十月革命」派の反ホルティ路線と大きく変化しながらも、ウィーンを拠点とした様々なハンガリー系亡命者ならびに彼らと交流のあった知識人たちの結節点として機能したという多様な側面を有した点で特徴的であった。これは、同紙が様々な政治状況の影響を受ける中で、第一次世界大戦後の国境変動によって生じた国民国家の分立の下でナショナリズムや共産主義が複雑に交錯していたことを表す。管見の限り『ウィーン・ハンガリー新聞』の読者層に明確に言及した先行研究は確認できないが、ハンガリー国境外に在住するハンガリー語を解する知識人による定期購読が『ウィーン・ハンガリー新聞』の読者層の大半を占めていたことが推測される<sup>(13)</sup>。彼らは主に旧ハンガリー王国時代からのハンガリー語による言論空間を引き継いでおり、掲載された論説に対して、時に編集部を持論や感想を寄せたり、自らが拠点とする論説紙に転載して自らの見解を表明したりすることで、第一次世界大戦後に形成された国境線を越えて相互に交流を行っていた。『ウィーン・ハンガリー新聞』もその言論空間の一つの場であり、同紙を拠点に活動した亡命政治家や亡命知識人に注目することは、ボーダースタディーズの一つの事例研究として意義を有するであろう。

(11) Litván György, *Jászi Oszkár* (Budapest: Osiris, 2003); *idem, A Twentieth-century Prophet: Oscar Jaszi 1875-1957* (Budapest & New York: Central European University Press, 2006) など。

(12) Litván, *Jászi Oszkár* (前注11参照), pp. 204-205; *A Twentieth-century Prophet* (前注11参照), p. 227.

(13) フランクの回顧録によれば、定期購読者の三分の二がスロヴァキア地域に住むハンガリー系住民であった。Frank, *Café Atlantis* (前注6参照), p. 106. 同紙発行部数の四分の三がチェコスロヴァキア内で流通していたという分析もある。“Miért tiltották ki a Bécsi Magyar Ujságot,” *Magyar Ujság* (January 5, 1921), p. 3.

## 1. 『ウィーン・ハンガリー新聞』

### 1.1 1919年秋から1920年半ばにかけてのウィーンにおけるハンガリー語の言論空間

ハンガリーでは、1919年8月1日の評議会革命政権退陣後に社会民主党右派による政権が成立した。しかし、この政権も同月6日のフリードリヒ・イシュトヴァーン(Friedrich István)によるクーデタで倒れる。フリードリヒ政権下では事前検閲と当局による評議会革命政権期に刊行された著作物の没収が行われ、該当する著作物の著者の多数がハンガリーから亡命した。亡命ハンガリー人の書籍出版の中心は第一にウィーンであり、1920年代には約50の新聞・雑誌が出版された<sup>(14)</sup>。また、ハンガリー国内では1918-19年の一連の革命、特に評議会革命の関係者やユダヤ人に対する急進右翼の暴力行為(「白色テロル」)も相次ぎ、多数の左派系の政治家や知識人がハンガリーから出国した。こうした政治家や知識人のうち、「十月革命」への参加者たちは、1919年秋から主にウィーンを拠点に亡命政治活動を本格化させた。1919年11月初めには当時のカーロイの滞在先だったボヘミアのドゥビー(Dubi)で、カーロイとヤーシを中心に「十月革命」参加者による10項目の基本方針が合意された<sup>(15)</sup>。彼らは「亡命者」と自称する統一された政治集団の形成を試みていた<sup>(16)</sup>。

1919年11月当時のウィーンでは、「ゲンドル・フェレンツ(Göndör Ferenc)の政治週刊紙」が副題のパンフレット『人間(Az Ember)』が非共産党員の亡命政治家や亡命知識人が集うハンガリー語論説紙として代表的であった。ハンガリー社会民主党右派で同党機関紙『人民の声』の編集員の経験もあるゲンドルは、ブダペシュトで1918年10月から同紙を刊行していた。彼は1919年11月13日からウィーンで刊行を再開する。同号にはカーロイや社会民主党中央派のクンフィ、社会民主党右派のヴェルトネル・ヤカブ(Weltner Jakab)も寄稿していた<sup>(17)</sup>。当初の『人間』には非共産党員の亡命政治家や亡命知識人が比較的幅広く集い、ハンガリーで形成されていく反革命的な政治体制を非難する論調を取った。

1920年5月初め、旧カーロイ党員のシモニ・ヘンリ(Simonyi Henri)は、カーロイ宛の手紙でウィーンにおける社会主義者と共産主義者内部での派閥の分立に言及した。彼はウィーンでの亡命政治家たちの様子が評議会革命政権が倒れた直後の反革命期とは大きく変わっていることを伝えながらも、共産主義者内ではクン・ベーラ(Kun Béla)の派閥とポガーニ・ヨージェフ(Pogány József)ならびにランドレル・イエネー(Landler Jenő)の派閥、社会主義者内ではクンフィ、ベーム、ローナイ・ゾルターン(Rónai Zoltán)、ガルバイ・シャーンドル(Garbai Sándor)の派閥(「独立した社会主義者」、社会民主党中央派の多数派と考えら

(14) Fülöp Géza, *Olvasók, könyvek, könyvtárak: művelődéstörténeti olvasókönyv 10-18 éveseknek* (Budapest: Magyar Média-pedagógiai Műhely, 1994) [http://vmek.oszk.hu/01600/01647/01647.pdf], p. 85.

(15) “Függelék IV. Az emigráció programja,” in *levelezése I* (前注3参照), pp. 745-746.

(16) Litván György, ed., *Jászi Oszkár naplója 1919-1923* (Budapest: MTA Történettudományi Intézet, 2001), p. 72.

(17) Károlyi Mihály, “A dolgozó magyarokhoz!” *Az Ember* (November 13, 1919), pp. 3-4; Weltner Jakab, “A ‘kompromittáltak’,” *Az Ember* (November 13, 1919), pp. 8-11; Kunfi Zsigmond, “Jegyzetek a diktatúra keletkezéséről,” *Az Ember* (November 13, 1919), pp. 12-18.

れる)、ヴェルトネル・ヤカブ派、ペイドル・ジュラ (Peidl Gyula) 派、ガラミとブヒンゲル・マノー (Buchinger Manó) とペイエル・カーロイ (Peyer Károly) の派閥(以上三派閥は社会民主党右派)、市民急進主義者のヤーシとセンデ、そして元カーロイ党の黨員としてホック・ヤーノシュ他数名という形で各派閥を分類した<sup>(18)</sup>。1918-19年の一連の革命に関与した政治家や知識人の1920年代前半のウィーンにおける派閥は概ねこの枠組みで推移する。

フランクは回顧録の中で、1920年5月当時のウィーンでの代表的論説紙として『人間』の他に、クンフィが編集長を務めた社会民主党中央派系の週刊紙『光明 (Világosság)』、ならびに『ウィーン・ハンガリー新聞』を挙げた<sup>(19)</sup>。『ウィーン・ハンガリー新聞』については次節で扱う。『光明』は1920年6月1日から1921年4月13日まで刊行されており<sup>(20)</sup>、フランクの記述は正確ではない。だが、クンフィら『光明』に集った社会民主党中央派は、1920年代にウィーンを拠点としたハンガリー人左派亡命政治家・知識人の中で独自の影響力を有した。彼らは第一次世界大戦後のウィーン市政を担ったオーストリア社会民主党と密接な関係にあり、第二インターナショナルとコミンテルンとの対立を調停して社会主義勢力の再統合を目指す「社会主義政党国際協同体」にも参加した<sup>(21)</sup>。

評議会革命政権退陣後のハンガリー共産党の動向についても簡単に整理しておきたい。クンらハンガリー共産党指導部は政権退陣後にオーストリアに出国し、ウィーンで活動を続けた。クンは1920年7月に捕虜交換によりモスクワへ送られ、評議会革命政権の再建を企図してモスクワからハンガリーの共産主義運動を引き続き指揮しようと考えた。一方、ランドレルはハンガリーの現実から切り離されている亡命共産黨員はハンガリー国内での共産主義活動を支えるべきだと主張した<sup>(22)</sup>。同じ頃、コミンテルン第二回大会(1920年7月19日～8月6日)では、コミンテルンへの加入条件として、加入を希望する全ての党に第二インターナショナルの「中央派」や改良主義との決別が定められた<sup>(23)</sup>。共産黨員の活動から社会民主黨員を排除する動きは、ハンガリーの亡命共産主義者の動向にも大きな影響を与えた。社会民主黨員の排除をめぐる問題は、1921年後半に頂点を迎える。1921年3月にドイツ中部(テューリンゲン州、アンハルト州、プロイセン州ザクセン県など)を中心に、ドイツ合同共産党とドイツ共産主義労働者党による「三月行動」が起きた。この「三月行動」には、コミンテルン執行委員会議長グリゴリー・ジノヴィエフ (Grigorii Yevseevich

(18) “530. Simonyi Henri Károlyi Mihályhoz (Bécs, 1920. május 12.),” in *levelezése I* (前注3参照), pp. 602-608.

(19) Frank, *Café Atlantis* (前注6参照), p. 56.

(20) Goriupp Alisz, “Adalékok a külföldi magyar sajtó bibliográfiájához,” *Magyar könyvszemle Új folyam* 33, nos. 1-2 (1926), p. 128.

(21) 西川正雄『社会主義インターナショナルの群像1914-1923』岩波書店、2007年、135-139頁。

(22) Lee Congdon, *Exile and Social Thought: Hungarian Intellectuals in Germany and Austria, 1919-1933* (Princeton: Princeton University Press, 1991), p. 49.

(23) 「資料39 共産主義インタナショナルへの加入条件(一九二〇年八月六日)」村田陽一編訳『コミンテルン資料集 第1巻』大月書店、1978年、214-218頁。

Zinoviev)の意向を受けたクンも深く関わっていた<sup>(24)</sup>。「三月行動」が失敗に終わると、クンはハンガリー国内の共産主義者に社会民主党への党費の支払いを拒否するように求めた<sup>(25)</sup>。ランドレルは、共産党が非合法化されたハンガリーでの共産主義者は労働組合と合法的な社会民主党の枠内で活動して主導権を握ろうとする以外に選択肢がないと考えており、こうした拒否はハンガリーでの更なる合法的な活動を妨げるものだと主張した<sup>(26)</sup>。このような対立は見られたが、ウィーンでは共産党関連の新聞として1920年2月からは『赤色新聞(Vörös Újság)』が<sup>(27)</sup>、同年6月からは週刊紙『プロレタリア(Proletár)』も刊行された<sup>(28)</sup>。

以上のように、1919年秋から1920年半ばにかけて、ウィーンではハンガリーからの亡命左派政治家・知識人による多くの派閥が形成され、それに呼応するように論説紙も刊行されるようになった。次節以降では、その代表紙の一つである『ウィーン・ハンガリー新聞』に注目し、同紙の編集方針をめぐる問題が当時の中央ヨーロッパにおける政治状況と密接に結びついていたことを明らかにしたい。

## 1.2 『ウィーン・ハンガリー新聞』

『ウィーン・ハンガリー新聞』は1920年代初頭のウィーンで代表的なハンガリー語論説紙の一つであったが<sup>(29)</sup>、編集方針は複雑な経過を辿った。同紙は創刊から1920年2月中旬まで反政府路線は明示していなかった。1919年10月31日付同紙の創刊の辞では「致命的なロシアの病をハンガリーにおいて永遠に取り除こう、害を為し得ないように原因物質を根絶しよう」<sup>(30)</sup>等の評議会革命を非難した表現が含まれる。1920年1月初めにはパリ講和会議に向かうハンガリー代表団の団長アポニ・アルベルト (Apponyi Albert) にインタビューも行っている<sup>(31)</sup>。

だが、リトヴァーンの「『ウィーン・ハンガリー新聞』は最初はハンガリーの反革命政府を支持する右翼新聞であった」<sup>(32)</sup>というような紹介には留保が必要である。フランクは「当

(24) 彼が派遣された経緯については、篠塚敏生『ヴァイマル共和国初期のドイツ共産党：中部ドイツでの1921年「三月行動」の研究』多賀出版、2008年、66-70頁など。

(25) Congdon, *Exile and Social Thought* (前注22参照), p. 49.

(26) *Ibid.*

(27) Goriupp, “Adalékok a külföldi magyar sajtó bibliográfiájához” (前注20参照), p. 129.

(28) *Ibid.*, p. 127.

(29) ただし実際の発行部数は不明確である。マルコヴィチはフランクの情報として1921年夏の自称発行部数は35,000部、うち30,000部が周辺国で定期購読、ウィーンで3,000部、ハンガリーへの密輸入が2,000部だと述べる。Markovics, “A Bécsi Magyar Újság” (前注8参照), p. 267. だがリトヴァーンは実際にハンガリーに持ち込まれたのは政府の監視用のみだと指摘する。Litván, *Jászi Oszkár* (前注11参照), p. 206; *A Twentieth-century Prophet* (前注11参照), p. 228.

(30) “Magyar lap...,” *Bécsi Magyar Újság* [以下BMU] (October 31, 1919), p. 1.

(31) “A magyar békedelegáció keresztülutazott Bécsben: Beszélgetés Apponyi Albert grófval,” *BMU* (January 6, 1920), p. 4.

(32) Litván, *Jászi Oszkár naplója* (前注16参照), p. 89.



初は市民急進主義者たちが同紙を編集しており、早晚——もしかすると恩赦によって——帰国できるかもしれないということを想定して、ハンガリーでの諸事件を全く扱わないか、実に注意深く扱うのみであった」と述べており<sup>(33)</sup>、当時の編集部員が将来の帰国可能性を考慮して現実的な選択をしていたことが考えられるからだ。編集体制が変わる前の1920年1月28日付のハンガリー政府の閣議では、ハンガリー国家とハンガリー国民軍に反対して煽動する、すなわちポリシェヴィキの精神を広めているという理由から、ウィーンで発行されている『ウィーン・ハンガリー新聞』（閣議録ではWiener Ungarische Zeitungと記載）の出版物の移送を制限することが通商大臣から提議された<sup>(34)</sup>。仮にこの新聞が『ウィーン・ハンガリー新聞(Bécsi Magyar Ujság)』を指すならば、編集方針の転換前から同紙がハンガリー政府に警戒されていたことになる<sup>(35)</sup>。したがって、本稿では創刊初期の同紙を反政府的態度は明示しない独立紙路線の時期と解釈したい。

『ウィーン・ハンガリー新聞』が左派路線に明確に転化したのは1920年2月中旬だった。同月13日にラーザール・イエネー(Lázár Jenő)が編集長に就任し<sup>(36)</sup>、親共産主義的な知識人であるガーボル・アンドルが編集の中核を担うようになった。これと共に同紙はハンガリー国内の反革命的な政治・社会体制を批判する論調を明確に打ち出した。この時期の同紙は小説や詩など文学関係の記事も多数掲載し、ガーボルは詩作でも積極的な執筆活動を行った。

但し、同紙編集部の内部体制については対外向けの形式と実態が異なっていた可能性も否定できない。ヤーシの1920年2月16日付の日記によれば、「十月革命」政権で大臣報道官を務めた社会民主党員のオルモシュ・エデ(Ormos Ede)が同紙を反体制的な路線で引き継いだ<sup>(37)</sup>。シモニもオルモシュの編集長就任をカーロイに伝えている<sup>(38)</sup>。一方、フランクの回顧録によれば、1920年2月以降に『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部が関係を持つよう

(33) Frank, *Café Atlantis* (前注6参照), p. 56.

(34) Magyar Országos Levéltár, K27 57R/ 67.

(35) 閣議録でウィーンがハンガリー語のBécsではなくドイツ語でWienと表記される例は時折見られる。例えば1920年8月3日の閣議ではガーボル・アンドルの著作の流通禁止の提議が承認されたが、その閣議録でも「ウィーンにおいてWienben」と表記されている。Magyar Országos Levéltár, K27 51R/ 76. 1920年2月25日付『ウィーン・ハンガリー新聞』は自紙がハンガリー国内への持ち込みが禁止されていることを批判する記事を掲載した。“A Bécsi Magyar Ujság nem mehet Magyarországba,” *BMU* (February 25, 1920), p. 1.

(36) “Hírek — A Bécsi Magyar Ujság szerkesztését a mai napon dr. Lázár Jenő vette át,” *BMU* (February 13, 1920), p. 4. 1923年2月1日にヤーシに交代するまで公式には彼が編集長だった。

(37) Litván, *Jászi Oszkár naplója* (前注16参照), p. 89. 先行研究では、ペーテルも同紙が届け出していた編集長の名と実際の編集長の名が常に一致していたわけではない可能性として、この記述に言及している。彼は『ウィーン・ハンガリー新聞』で公式の責任編集者として名を連ねたりヒェルト・コンスタンツ(Richard Konstandt) (1919年10月31日～1920年8月30日)とA. J. トルマン(A. J. Tollmann) (1920年8月31日～1923年12月16日)が同紙とあまり関係がなかったことも指摘した。彼によれば、1920年代の外国語新聞に対するオーストリアの出版法の規定から、同国の国籍を持つ責任編集者二名が設置されていることが重要であった。Péter, “Stellungen und Stellungnahmen” (前注10参照), p. 5.

(38) “509. Simonyi Henri Károlyi Mihályhoz (Bécs, 1920. február 23.),” in *levelezése I* (前注3参照), p. 571.

になった著名な共産主義者や急進左翼の新聞執筆者の代表例がガーボルであり<sup>(39)</sup>、他にも執筆者がいる中で、オルモシュは同紙で亡命社会民主党員の代表的存在であり、クンフィと共に『光明』の編集も行って<sup>(40)</sup>。フランクによれば、自身が『ウィーン・ハンガリー新聞』に参加した1920年5月時点で最初期の同紙編集部からは二人だけが残っており、うち一人が編集長のラーザールであった<sup>(41)</sup>。但し、ラーザールはガーボルの加入後は後景に退いていた<sup>(42)</sup>。したがって、1920年2月の編集体制の大幅な変更を経て『ウィーン・ハンガリー新聞』ではラーザールが公式には編集長となり、親共産主義派のガーボルが編集部を主導してハンガリー政府批判を行い、そしてオルモシュも社会民主党員の立場から編集部に一定の影響力を有していたと考えられる。

## 2. 『ウィーン・ハンガリー新聞』編集・運営体制の変化

### 2.1 反ホルティ路線の明確化

株式会社形式を採った『ウィーン・ハンガリー新聞』の所有権は不安定であり、株式の大半を所有する者が誰か、あるいは所有者による編集部への介入の有無との関連で、その所有者を後援する政治勢力が何者かという点が度々問題となった。更に、最終的には財政難が同紙の廃刊の原因となる。同紙の株主については不明な点も多い。1921年6月にヤーシが編集と所有の両面で主導権を委譲されること以外には、先行研究ならびに刊行済みの回顧録で言及されることは少ない<sup>(43)</sup>。

一方、同時期に『ウィーン・ハンガリー新聞』の所有権や編集方針を取り上げた複数の記事が、これまでの経過として同紙の所有権に関しても言及している。これらの記事は『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集方針の変更やそれを迫られる事件を受けて主に同紙に批判的な立場から執筆されたものであり、また細部の記述内容が各々異なるため、各記事の情報の正確さを検証することは今後の課題である。しかし、少なくとも当時のウィーンでの言論空間、ならびに中央ヨーロッパ各国(特にハンガリー、オーストリア、チェコスロヴァキア)の政治家や知識人の中での同紙の位置づけに関する共通認識を探ることは可能だと思われる。

そこで、ブダペシュトの『新聞(Az Újság)』の記述として『ウィーン・ハンガリー新聞』が転載した記事の内容(1920年2月21日付)<sup>(44)</sup>、ゲンデルの『人間』上の記事(1920年7月18日付)<sup>(45)</sup>、

(39) Frank, *Café Atlantis* (前注6参照), pp. 56-57.

(40) *Ibid.*, p. 56.

(41) *Ibid.*, p. 57.

(42) *Ibid.*

(43) フランクの回顧録では後述する1920年7-9月の『ウィーン・ハンガリー新聞』買収事件が言及されている。  
*Ibid.*, pp. 63-69.

(44) “A Bécsi Magyar Újság függetlensége,” *BMU* (February 21, 1920), p. 4.

(45) Göndör Ferenc, “Horthyék megvásárolták a Bécsi Magyar újság-ot!” *Az Ember* (July 18, 1920), p. 9.

ブラチスラヴァでハンガリー語話者向けに発行されていた『ハンガリー新聞(Magyar Ujság)』の記事(1921年1月5日付)<sup>(46)</sup>の計三点の内容にもとづき、1919年10月末の創刊から1920年2月の編集方針の転換までの時期について、同紙の所有者や編集部に対する共通認識を整理したい。いずれの記事にも共通するのは、『ウィーン・ハンガリー新聞』がローゼンベルク(Rosenberg)という名のサラミ製造業者の資金によって創刊されたが、間もなく資金難に陥ってヨレシュ(Jollesch)という事業家に売却され、これを契機にラーザールが編集長となったという点である。創刊者はブダペシュトの『正午新聞(Déli Hírlap)』、後に『八時新聞(8 Órai Újság)』の経済コラム執筆者であったローナ・ラヨシュ(Róna Lajos)だった<sup>(47)</sup>。

1920年2月のラーザールの編集長就任直後には、ブダペシュトで発行されている『新聞』が、『ウィーン・ハンガリー新聞』の新たな所有者の背後に精神的指導者としてカーロイ・ミハイが存在し、親チェコスロヴァキアの政治宣伝を行っていると批判した。1920年2月21日付の『ウィーン・ハンガリー新聞』は当該記事を引用したが、その引用文中では、『ウィーン・ハンガリー新聞』の新たな編集員が主にカーロイの支持者から成っていること、同紙によってスロヴァキアでのハンガリー人の間でチェコ人を支持する雰囲気醸成しようとするべく、領土修正主義的な計画や国王の復帰を否定する記事を執筆するという条件で、スロヴァキアへの同紙の流通が許可されていること、ならびに、その当時ブダペシュトからウィーンへ赴いていた印刷工はチェコのプロパガンダに従事するのを嫌い、今ではブダペシュトへと帰還していることが紹介されている。『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部はこれらを否定し、同紙の編集部の独立性を主張した<sup>(48)</sup>。

以上から、『ウィーン・ハンガリー新聞』が1920年2月に明確な反ハンガリー政府路線へと転化したこと、ならびに主要株主が同紙編集部に介入していることが、当時の中央ヨーロッパにおけるハンガリー語の言論空間の中で広く共有されていた認識だと考えられる。

## 2.2 所有権をめぐる問題

1920年7月から9月にかけての『ウィーン・ハンガリー新聞』では、アメリカ合衆国市民の実業家「ブラウン・マールクシュ(Braun Márkus)」<sup>(49)</sup>が同紙の株式の過半数を取得し、編集部に対してハンガリー政府批判の停止を要求したことが非常に大きな問題となった。フランクによれば、スロヴァキアのルジヨムベロク(Ružomberok)の繊維工場経営者であったヨレシュと共に主要株主であった弁護士ヴァーシャルヘイ(Vásárhelyi)という人物に編集部の一人が確認し、ブラウンがウィーンのハンガリー大使館から買収の委託と資金を受

(46) “Miért tiltották ki a Bécsi Magyar Ujságot” (前注13参照), p. 3.

(47) *Ibid.*; Göndör, “Horthyék megvásárolták a Bécsi Magyar ujság-ot!” (前注45参照), p. 9.

(48) “A Bécsi Magyar Ujság függetlensége” (前注44参照), p. 4.

(49) 参照したハンガリー語文献では全て姓・名の順で記載されており、ブラウンが姓である。

け取っていたことが明らかになった<sup>(50)</sup>。その調査によれば、当初、ヨレシュとヴァーシャー  
ールヘイの両名はチェコスロヴァキア政府関係者の意向も受けて『ウィーン・ハンガリー  
新聞』を反ホルティ路線にする腹づもりであったが、編集部を主導するガーボルら親共産  
主義派の活動が大きくなったことでチェコスロヴァキア政府側の反発も高まり、彼らは次  
第に同紙の発行に好意的ではなくなった。こうしてブラウンが株式を取得して『ウィーン・  
ハンガリー新聞』の所有者になった<sup>(51)</sup>。

フランクによれば、編集部はこの買収の件の公表を決めたが、その前に新聞の新しい所  
有者に彼らの意思を伝え、可能であれば『ウィーン・ハンガリー新聞』を買い戻すために話  
し合いを始めることにした<sup>(52)</sup>。同紙編集部は、7月15日付での声明を7月18日付の第一面  
に掲載した。この中で編集部は同紙の所有者の変更を認めたが、同時に、編集側からの明  
言がない限りは編集方針に変更がないという態度が示された<sup>(53)</sup>。ガーボルによれば、この  
編集部の主張に対して、ブラウンは7月17日付でラーザールに宛ててこの声明が一語一句  
違わずブラウン自身に適用されることを伝えていた<sup>(54)</sup>。

この『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部の動きは、ウィーンを拠点とした亡命政治家や  
亡命知識人に大きな衝撃を与えた。中でもゲンデルは、『人間』上で『ウィーン・ハンガリー  
新聞』が間もなく「白色テロル」派の新聞になる恐れがあることを警告した<sup>(55)</sup>。但し、ゲ  
ンデルはこの買収事件と創刊当初の『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集方針が明確なハン  
ガリー政府批判ではなかったこと、ならびに編集長ラーザールがその最初期から編集部に  
関わっていたことを結びつけ、『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部全体を攻撃した<sup>(56)</sup>。同  
紙の編集部内に親ハンガリー政府的な人物が含まれることがウィーンの亡命ハンガリー系  
知識人の一部で疑われていたことがうかがえる。

この買収事件は、1920年9月18日に同紙の株式を編集長ラーザールと出版部長バルナ・  
シャンドル(Barna Sándor)が引き継ぐ契約が結ばれて決着する<sup>(57)</sup>。ガーボルは9月21日  
付の同紙で7月の買収以降の顛末を伝え、この買収計画の背後にウィーンのハンガリー大  
使館の報道官ライヒ・アールパード(Reich Árpád)らが存在することを指摘した<sup>(58)</sup>。実際  
にその直後の1920年9月23日にチェコスロヴァキア社会民主党機関紙『人民の権利(Právo

(50) Frank, *Café Atlantis* (前注6参照), p. 65.

(51) *Ibid.*

(52) *Ibid.*, p. 66.

(53) “Nyilatkozat,” *BMU* (July 18, 1920), p. 1.

(54) Gábor Andor, “Nyolc heti harc Horthyék pénze ellen!” *BMU* (September 21, 1920), p. 1.

(55) Göndör Ferenc, “Horthyék megvásárolták a Bécsi Magyar ujság-ot!” (前注45参照), pp. 9-10; *idem*, “A Bécsi Magyar Ujság megvásárlásának – Ki az a Braun Márkus és ki az a Jolesch?” *Az Ember* (July 25, 1920), pp. 7-11; *idem*, “A Bécsi Magyar Ujság Horthyék kezében!” *Az Ember* (August 29, 1920), pp. 5-7.

(56) 最も顕著なのがGöndör Ferenc, “Gábor,” *Az Ember* (August 1, 1920), p. 6.

(57) Frank, *Café Atlantis* (前注6参照), p. 68.

(58) Gábor Andor, “Nyolc heti harc Horthyék pénze ellen!” *BMU* (September 21, 1920), p. 1.

lidu)』がライヒによるスロヴァキアでの親ハンガリー的なプロパガンダ工作の疑惑を報じ、これを契機に1920年9月下旬から10月上旬にかけてのオーストリアとチェコスロヴァキアでは、ウィーンのハンガリー大使館によるプロパガンダ工作が大きく報じられた<sup>(59)</sup>。その報道では、ウィーンのハンガリー大使館による『ウィーン・ハンガリー新聞』の買収計画についても言及された<sup>(60)</sup>。

以上のように、『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集部はハンガリー政府側からの働きかけと疑われる買収の動きを排除することに成功した。しかし、1920年2月以降の同紙の所有者だったヨレシュとヴァーシャルヘイが編集方針を快く思っていなかったことがブラウンによる買収の背景だと説明され、ブラウンがハンガリー政府批判を止めるように編集部に申し入れたことから明らかなように、所有者と編集部が分かっていたことは『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集方針が今後も不安定化する可能性を有していた。

ところで、カーロイら「十月革命」に参加した亡命政治家・知識人は1920年7月初めの会合で、彼らが『ウィーン・ハンガリー新聞』の主導権掌握を目指すことを決めていた<sup>(61)</sup>。この会合の結果を受け、ヤーシはシモニが『ウィーン・ハンガリー新聞』の件で会合を開こうとしている旨を7月8日付の日記に書いていた<sup>(62)</sup>。ブラウンによる『ウィーン・ハンガリー新聞』買収の知らせを受け、7月16日にはヤーシ、ホック、センデ、シモニ、ベレニが同紙の問題について話し合いを行った<sup>(63)</sup>。この際、ヤーシは新しい新聞を創刊することを支持していた。買収事件が決着した直後の9月23日には、ヤーシ、バーム、ユハース＝ナジ・シャンドル(Juhász Nagy Sándor)、ホックによる会合が開かれ、『ウィーン・ハンガリー新聞』を拠点とした政治活動の計画が再度話し合われている<sup>(64)</sup>。一方、ヤーシは革命回顧録『ハンガリーのゴルゴダの丘、ハンガリーの復活：二つの革命の成果、意義と諸教訓』<sup>(65)</sup>を同年10月末にウィーン・ハンガリー出版から刊行した。同社は『ウィーン・ハンガリー新聞』の印刷元であった<sup>(66)</sup>。これを契機に、ヤーシは『ウィーン・ハンガリー新聞』上でのインタビューに応じるなど<sup>(67)</sup>、同紙との関係を次第に深めていった。

(59) 本稿では『人民の権利』の告発内容のドイツ語訳を転載したオーストリア社会民主党機関紙『労働者新聞』の記事を参照した。“Die Verschwörung Horthy-Ungarns gegen die tschecho-slovakische Republik: Ein ‘streng vertraulicher Bericht’ der ungarischen Gesandtschaft in Wien,” *Arbeiter Zeitung* (September 23, 1920), pp. 3-4. 本件を報じた他の記事は“Horthy pokolgépei Európa békéje ellen!” *BMU* (September 23, 1920), p. 1; “Mad’arská propaganda na Slovensku: odhalenie ‘Práva lidu’,” *Slovenský denník* (September 23, 1920), p. 3 など。

(60) “Die Verschwörung Horthy-Ungarns gegen die tschecho-slovakische Republik,” *Arbeiter Zeitung* (September 23, 1920), p. 3.

(61) Litván, *Jászi Oszkár naplója* (前注16参照), p. 127.

(62) *Ibid.*, p.128.

(63) *Ibid.*, p.131.

(64) *Ibid.*, p.145.

(65) Jászi Oszkár, *Magyar kalvária, magyar feltámadás: A két forradalom értelme jelentősége és tanulságai* (Bécs: Bécsi Magyar Kiadó, 1920).

(66) *Ibid.*, front page; “0140-BECSEI MAGYAR UJSAG [Wiener Ungarische Zeitung] 31.10.1919-16.12.1923” [<http://www.oewac.ac.at/cgi-bin/cmc/wz/imp/0140>].

(67) “Jászi Oszkár az újabb politikai fejleményekről,” *BMU* (November 16, 1920), p. 3.

## 2.3 チェコスロヴァキアでの流通禁止処分

1920年12月に『ウィーン・ハンガリー新聞』はチェコスロヴァキアで流通禁止処分を受けた<sup>(68)</sup>。ヤーシからカーロイへの報告によると、処分理由は、同紙が「ホルティ・共産主義者の印刷物(Horthy-kommunista sajtótermék)」であるためだった<sup>(69)</sup>。親共産主義的な人物が編集の中心を担う急進左派的な新聞だった『ウィーン・ハンガリー新聞』にハンガリー政府側からの働きかけが疑われる買収計画が進んでいたことからうかがえるように、この三者の間に関係性を指摘することは決して不可能ではない。この背景には当時の中央ヨーロッパ、特に1920年6月4日のトリアノン条約調印後も続くハンガリーとチェコスロヴァキアとの間での政治的緊張関係と、スロヴァキアにおける共産主義勢力の伸張が複雑に絡み合っていた。

ハンガリー政府が対スロヴァキア政治工作の手段として亡命ハンガリー系共産主義者を利用しているという疑惑は、1920年夏には既にウィーンで活動するハンガリー系の亡命政治家や亡命知識人の間で指摘されていた。1920年8月1日付『人間』では、同紙編集員のディオージェ・ティボル(Diószeghy Tibor)が、1919年秋にハンガリー政府がスロヴァキアでボリシェヴィキを煽動する工作への協力を求められていたことを告発した<sup>(70)</sup>。先述のように、1920年9月下旬から10月上旬には、ウィーンのハンガリー大使館による対スロヴァキア政治工作もチェコスロヴァキアとオーストリアで大きく報じられた。

さて、『ウィーン・ハンガリー新聞』の流通禁止処分に関して、ブラチスラヴァで刊行されていた『ハンガリー新聞』は1921年1月5日付で「なぜ『ウィーン・ハンガリー新聞』は禁止されたのか」という記事を掲載し<sup>(71)</sup>、「[同紙の流通]禁止は[……]『ウィーン・ハンガリー新聞』による民主主義と社会的平和の利益を危険に陥れる振る舞いによって引き起こされた」<sup>(72)</sup>と明らかにした。同記事は1920年2月の『ウィーン・ハンガリー新聞』の所有権の変更に関及した後、同紙編集部と共産党との関連を指摘した<sup>(73)</sup>。ヤーシに関しても、バルナとラーザールが運営するウィーン・ハンガリー出版から革命回顧録を刊行したのを契機に両者と関係を持つようになり、彼の知名度の高さが『ウィーン・ハンガリー新聞』の継承諸国での拡大に寄与することが期待されていたと分析された<sup>(74)</sup>。同記事によれば、『ウィーン・ハンガリー新聞』はボリシェヴィキに対して消極的な態度を取り続けていたことから、

(68) スロヴァキア統治全権大臣マルティン・ミチュラ(Martin Mičura)により11月28日に発効可能となった。“A bécsi Magyar Ujság kitiltása,” *Magyar Ujság* (December 2, 1920), p. 3.

(69) “631. Jászi Oszkár Károlyi Mihályhoz” (前注3参照), pp. 729-731.

(70) Diószeghy Tibor, “Mennyit kaptam a magyar kormánytól, hogy bolsevik agitációt csináljak Szlovákiában?” *Az Ember* (August 1, 1920), pp. 12-16.

(71) “Miért tiltották ki a Bécsi Magyar Ujságot” (前注13参照), pp. 3-4.

(72) *Ibid.*, p. 3.

(73) *Ibid.*

(74) *Ibid.*

チェコスロヴァキア政府は処分を出すことができなかつた<sup>(75)</sup>。だが、ホルティ派による買収疑惑の払拭を利用しながら、バルナとラーザールが共産党の資金を使って同紙を自分たちの活動のために組織化した疑いが高まっていた<sup>(76)</sup>。ラーザールは買収疑惑の払拭のためにウィーンのハンガリー大使館員に記事の執筆を依頼し、その人物が後に発表した著作の中でラーザールの裏工作の役割に言及したものがあつたために『ウィーン・ハンガリー新聞』は流通禁止処分を受けたというのが、『ハンガリー新聞』の主張であつた<sup>(77)</sup>。

同記事では更に、流通禁止処分が下された後の『ウィーン・ハンガリー新聞』についても言及された。記事によれば、『ウィーン・ハンガリー新聞』の発行部数の四分の三がチェコスロヴァキア内での流通であつたために、同紙の流通禁止処分は運営に致命的な打撃を与えた<sup>(78)</sup>。流通禁止処分が下つた後の数週間、バルナとラーザールはプラハとブラチスラヴァで対応に追われ、ブラチスラヴァの新聞販売会社アトラスの株主たちに助けを求めた。同社では少し前に『ウィーン・ハンガリー新聞』で勤務していたことのある人物が働いており、その人物が仲介者となつた。バルナたちが流通禁止処分の撤回の斡旋のためにアトラス社へ高額の対価を約束していたことは、当時ブラチスラヴァで公然の秘密だつたという<sup>(79)</sup>。

以上のような『ハンガリー新聞』での批判に対して、『ウィーン・ハンガリー新聞』は「ロボズ・イムレ——ある亡命詐欺師の経歴」と題した無署名の反論記事を1月13日から15日の三回にわたって連載し<sup>(80)</sup>、『ハンガリー新聞』の批判内容を全面的に否定した。文筆家のロボズ・イムレ(Roboz Imre)は1919年秋にブダペシュトでパンフレット『ペシュト生活(Pesti Élet)』の、1920年春にはコロジュヴァールで週刊紙『新しい人間』の編集に携わり、「白色テロル」を非難する執筆活動を行つていた<sup>(81)</sup>。『ハンガリー新聞』上での批判は無署名であつたが、『ウィーン・ハンガリー新聞』の反論記事ではロボズが同記事を執筆したことが前提とされている<sup>(82)</sup>。1月13日付と14日付の記事では『ハンガリー新聞』側の記述を引用しながら、バルナ他の『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部員と共産党ならびにハンガリー政府関係者との関係を否定した<sup>(83)</sup>。また、ヤーシがウィーン・ハンガリー出版から革命回顧

(75) *Ibid.*

(76) *Ibid.*, pp. 3-4.

(77) *Ibid.*, p. 4.

(78) *Ibid.*

(79) *Ibid.*

(80) “Roboz Imre-Egy emigrációs szélhámos karrierje,” *BMU* (January 13, 1921), p. 5; “Roboz Imre-Egy emigrációs szélhámos karrierje-II,” *BMU* (January 14, 1921), p. 5; “Roboz Imre-Egy emigrációs szélhámos karrierje,” *BMU* (January 15, 1921), p. 5.

(81) 1919年11月13日付の『人間』はロボズがハンガリーを離れた旨を報じ、彼が『ペシュト生活』で「白色テロル」への攻撃を行つていた功績を称えた。“Roboz úr,” *Az Ember* (November 13, 1919), p. 31.

(82) “Roboz Imre-Egy emigrációs szélhámos karrierje,” *BMU* (January 13, 1921), p. 5.

(83) *Ibid.*; “Roboz Imre-Egy emigrációs szélhámos karrierje-II,” *BMU* (January 14, 1921), p. 5.

録を刊行した件は金銭や取引が絡んだものではないことを示唆し、アトラス社への依頼も否定した<sup>(84)</sup>。1月15日付の記事では1919年秋以降のロボズ本人の動向が紹介された。その中で、彼が資金の借り逃げを度々行っていた人物であり、『ハンガリー新聞』に問題の記事を書いたのは、彼が『ウィーン・ハンガリー新聞』に申し入れた金銭的支援を断られた後に『ハンガリー新聞』の支援を受けるようになったからであると結論づけられた<sup>(85)</sup>。そして反論記事は、13日の最初の反論記事に対してロボズから送られたとする電報の転載で締めくくられた。この電報でロボズは『ハンガリー新聞』への問題の記事の寄稿を否定した<sup>(86)</sup>。

以上のような『ハンガリー新聞』と『ウィーン・ハンガリー新聞』の間での論争の事実関係を判断するには更なる史料にもとづく検討が必要である。だが、この論争からは、旧ハンガリー王国領を含む継承諸国においてハンガリー語を介した言論空間が国境を越えて成立しており、そのような言論空間内を移動しながら活動するトリックスター的な知識人が存在したことを読み取ることができる。

さて既に述べたように、「十月革命」に参加した亡命政治家・知識人たちは、『ウィーン・ハンガリー新聞』の主導権獲得を目指していた。ヤーシは1920年夏以降に回顧録の出版を契機として『ウィーン・ハンガリー新聞』との関係を深めていた。したがって、『ウィーン・ハンガリー新聞』のチェコスロヴァキアでの流通禁止処分は、当時の編集部だけでなくカーロイを中心とする「十月革命」派の活動にも大きな衝撃を与えた。ヤーシはカーロイに対して、この処分の背景として、ハンガリー社会民主党右派によるブラチスラヴァでの政治活動と、『ウィーン・ハンガリー新聞』を主導していたガーボルらの親ポリシェヴィキ的な態度を指摘した<sup>(87)</sup>。社会民主党右派によるブラチスラヴァでの政治活動について、彼はガラミとポリシェヴィキは無関係だと考えていたが(ヤーシによればクンフィも同様の見解だった)、ガラミの仲間がブラチスラヴァで流通禁止処分を招くような活動を数カ月来行っていたことをカーロイに伝えた<sup>(88)</sup>。

また、ヤーシは親ポリシェヴィキ的な態度を示すガーボルらに対する嫌悪感を露わにし

(84) *Ibid.*

(85) “Roboz Imre-Egy emigrációs szélhámos karrierje,” *BMU* (January 15, 1921), p. 5.

(86) *Ibid.*

(87) “631. Jászi Oszkár Károlyi Mihályhoz” (前注3参照), p. 730.

(88) *Ibid.* 当時のガラミは旧カーロイ党右派のロヴァーシと共に新たな新聞の創刊を検討しており、二人は1921年2月から1923年5月にかけて共同編集長としてウィーンで日刊紙『未来』を発行する。後述するように、1922年9月16日のハンガリー議会では、同年8月末にウィーンで開かれた列国議会同盟第20回本会議の期間中に、同会議に参加したいいわゆる自由主義系の議員が「反逆者」たる亡命者と会っていたことを非難されるが、同議員はロヴァーシがブラチスラヴァで行った演説が領土修正主義的であるとしてチェコスロヴァキア当局から禁止を受けた事件に言及し、ロヴァーシから愛国主義を学んだと弁解した。この事件の詳細について筆者はまだ確認ができていないが、少なくともガラミと共同行動を取る場面があった人物がハンガリー側の領土修正主義を疑われるような活動をブラチスラヴァで行っていた可能性がある点は指摘できるだろう。“A nemzetgyűlés 52. ülése,” in *Az 1922. június hó 16-ára hirdetett Nemzetgyűlés naplója*, vol. 4 (Budapest: Az Athenaeum Irodalmi és Nyomdai Részvénytársulat Könyvnyomdája, 1922), pp. 398-409.



ながら、自身が『ウィーン・ハンガリー新聞』を救うためにあらゆることを行っているとカーロイに伝えた<sup>(89)</sup>。ガーボルは1920年にブラチスラヴァでナジ・ジュラ(Nagy Gyula)の編集により短期間発行されていた社会主義系の社会・文学週刊紙『闘争(A Harc)』にも寄稿していたが、この『闘争』はチェコスロヴァキア社会民主党に参加していた共産主義者を支持していた。この共産主義者たちは1921年5月にチェコスロヴァキア共産党を結成する<sup>(90)</sup>。ここからも、ガーボルとスロヴァキアの共産主義者との間で一定の交流があったことが推定できる。

こうしたハンガリー系亡命者によるスロヴァキアでの社会主義運動ないし共産主義運動は、スロヴァキアの政治状況とも密接に関係していた。チェコスロヴァキア建国後、ドイツ系あるいはハンガリー系住民は同国内で民族的少数派となり、彼らの政治活動を取り巻く情勢は大きく変化した。スロヴァキアにおけるドイツ系・ハンガリー系の労働運動指導者にとっては、チェコスロヴァキア社会民主党に参加することは、ナショナル・アイデンティティや政治勢力を失う可能性があるだけでなく、ブラチスラヴァの人口の多数派を構成するドイツ系・ハンガリー系住民の間で社会民主主義運動の評判が低下する恐れがあった<sup>(91)</sup>。1920年4月の国会議員選挙では、ドイツ系・ハンガリー系の社会民主主義者はチェコスロヴァキア社会民主党と合同できず、独自のドイツ＝ハンガリー社会民主党として選挙に臨んだ<sup>(92)</sup>。1920年4月の国会議員選挙において、スロヴァキアではチェコスロヴァキア社会民主党が勝利を収めた<sup>(93)</sup>。

一方、社会主義への国際的な革命闘争を強く主張することでネイションの違いを相殺できるという観点から、1920年には特にブラチスラヴァのドイツ系・ハンガリー系住民の間での社会民主主義運動において親共産主義派の重要度が増した<sup>(94)</sup>。同年5月初めには、ブラチスラヴァのドイツ系・ハンガリー系の社会民主主義者の運動は共産主義者の影響を強く受けるようになった。1920年夏には、それまで比較的穏健だったブラチスラヴァでも、ドイツ＝ハンガリー社会民主党内で共産主義寄りの左派が台頭した。同年12月後半には、ブラチスラヴァで共産主義者が主導したゼネストが行われた<sup>(95)</sup>。

スロヴァキアで伸張する共産主義運動では、ハンガリーからの亡命共産主義者が重要な役割を果たしていた。このため、1919年8月の評議会革命政権崩壊後の「白色テロル」を逃

(89) “631. Jászi Oszkár Károlyi Mihályhoz” (前注3参照), p. 730.

(90) Siklós András, *Az 1918-1919. évi magyarországi forradalmak: források, feldolgozások* (Budapest: Tankönyvkiadó, 1964), p. 147.

(91) Pieter C. van Duin, *Central European Crossroads: Social Democracy and National Revolution in Bratislava (Pressburg) 1867-1921* (New York/ Oxford: Berghahn, 2009), p. 357.

(92) *Ibid.*, p. 359.

(93) *Ibid.*, pp. 368-369.

(94) *Ibid.*, p. 359.

(95) “Sprisahanie bolševikov proti republike,” *Slovenský denník* (December 17, 1920), p. 1.

れてハンガリーからチェコスロヴァキアへ亡命した共産主義者の保護の問題が論争となった<sup>(96)</sup>。スロヴァキア統治全権大臣イヴァン・デーレル(Ivan Dérer)は7月18日に布告を出し、「社会的・政治的混乱を煽動すること」に関与した外国人共産主義者に対する保護を拒否してスロヴァキアから追放する可能性を与えた<sup>(97)</sup>。このデーレルの布告はハンガリー人の対スロヴァキア政治煽動に反対するものと見なされ、チェコスロヴァキア政府寄りの中道系新聞『スロヴァキア日報(Slovenský denník)』は肯定している<sup>(98)</sup>。フランクは、既にプラハで1920年夏に『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集員の多数派が共産主義思想の持ち主だと知られていたこと、そして編集員の多数派が親共産主義的であったという事実自体が既に同紙へのあら探しや同紙の没収頻度の増加のためには十分であったことを指摘しており<sup>(99)</sup>、同紙の流通禁止処分もスロヴァキアでの共産主義運動への取り締まりの一環であったと考えられる。

このように、1920年末のチェコスロヴァキア、特にスロヴァキアでは、ハンガリーからの政治的働きかけと同地でのハンガリー系共産主義者の活動の拡大に対する警戒が高まっていた。先の『ハンガリー新聞』による『ウィーン・ハンガリー新聞』に対する批判は、確かにその事実関係の詳細は今後検証される必要があるものの、当時のスロヴァキアにおける当局側の認識を反映していたと考えられる。『ウィーン・ハンガリー新聞』に対する流通禁止処分は、1920年に見られたスロヴァキアでの共産主義の伸張とハンガリーからの領土修正要求に繋がる政治的働きかけへの脅威が複雑に絡まり合う状況の一つの結果であった。

### 3. ヤーシによる『ウィーン・ハンガリー新聞』の主導権の獲得

#### 3.1 ヤーシによる編集部への関与の強まり

『ウィーン・ハンガリー新聞』の流通禁止処分は、同紙の流通先の大部分がチェコスロヴァキアだったために運営面で打撃を与えただけでなく<sup>(100)</sup>、編集方針にも大きな影響を与えた。フランクによれば、運営面での打撃から、彼ら当時の『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部は、同紙の編集において市民急進党とハンガリー社会民主党の者を前面に出すようにというラーザールとバルナからの要望を受け入れる必要が生じた<sup>(101)</sup>。1921年1月以降、ガーボルや共産主義に共感的な同僚たちではなく、ヤーシとその同僚たちが『ウィーン・ハンガリー新聞』の政治路線を支配する。フランクによれば、それはヤーシたちが1920年末にプラハに赴いて、チェコスロヴァキア政府の出版当局から『ウィーン・ハンガリー新

(96) Duin, *Central European Crossroads* (前注91参照), p. 370.

(97) *Ibid.*, p. 371.

(98) “Proti maďarským agitátorom,” *Slovenský denník* (July 18, 1920), p. 3.

(99) Frank, *Café Atlantis* (前注6参照), pp. 105-106.

(100) *Ibid.*, p. 106; “Miért tiltották ki a Bécsi Magyar Ujságot” (前注13参照), p. 4.

(101) Frank, *Café Atlantis* (前注6参照), p. 106.

聞』内での共産主義の影響を止めることの責任を負い、それによって流通禁止処分の撤回に成功したためだった。以後、ヤーシは同紙で圧倒的な権力を持った人物となり、記事の検閲を行う他、ガーボルらそれまでの編集部員の路線とも対立するようになった。このため、それまで編集部を主導していた親共産主義者たちは1921年夏以降にガーボルから順に編集部を離れていく<sup>(102)</sup>。1921年1月12日付のヤーシの日記にも「私の介入にもかかわらず『ウィーン・ハンガリー新聞』がまだスロヴァキアから排除されたままなのは悩ましい」<sup>(103)</sup>と書かれており、彼が同紙の流通禁止処分の問題を解決するためにチェコスロヴァキア政府側に何らかの働きかけを行っていることが推測される。1920年12月以降の『ウィーン・ハンガリー新聞』では、ヤーシが1920年12月半ば以降に同紙への寄稿を本格化させたのに対し、ガーボルの著作の掲載頻度は大きく減少した。

カーロイやヤーシたち「十月革命」政権に参加した亡命政治家や亡命知識人は、反ホルティ活動の後ろ盾として、亡命初期からチェコスロヴァキア政府に期待を寄せていた。しかし1921年3月には、彼ら、特にカーロイの国際的立場を脅かす恐れのある事件が相次いだ。カーロイらは亡命初期より進めていたアメリカ合衆国での講演計画を実行に移そうとしたが、フィレンツェでの共産主義者による騒擾の影響を受け、フィレンツェの当局からイタリアの共産党員に資金提供を行った疑いをかけられたカーロイが3月初めにフィレンツェからイタリア・オーストリア国境近くのフィラッハに移送され、警察の監視下に置かれた<sup>(104)</sup>。3月14日には彼らが頼みとしていたチェコスロヴァキアのエドヴァルド・ベネシュ外相(Edvard Beneš)とハンガリーのテレキ・パール首相(Teleki Pál)、グラツ・グスタフ外相(Gratz Gusztáv)との会談がオーストリアのブリュック・アン・デア・ライタ(Brück an der Leitha)で行われ、外交関係の回復が図られつつあった。3月下旬にはハンガリー前国王カーロイ四世(オーストリア皇帝カール一世)がハンガリーに帰国して摂政ホルティに王位を要求した。このカーロイ四世の要求は失敗に終わるが、事態に対応できなかったハンガリーのテレキ政権は退陣する。代わって4月に首相に就任したベトレン・イシュトヴァーン(Bethlen István)は国内政治の安定化と権威主義的な政治体制の確立を進める。ヤーシはユーゴ政府と交渉してカーロイの安全の保障に努め、1921年4月にカーロイはダルマツィアに拠点を移した。ハンガリーが体制の変革が伴わないまま国際政治の場に復帰を進める一方で、カーロイたちを取り巻く情勢は次第に悪化していた。このため、彼らは共産主義でもなく、軍事的行使も辞さない当時のハンガリー政府のような領土修正主義でもない形で「十月革命」を共通項とした政治的独自性を訴える必要に迫られていた。

ヤーシは、1921年4月上旬から具体的に『ウィーン・ハンガリー新聞』の主導権獲得のた

(102) *Ibid.*

(103) *Ibid.*, p. 167.

(104) *Ibid.*, pp. 178-179.

めに動き始めた<sup>(105)</sup>。彼は、自身が世紀転換期のブダペシュトで主導していた改革派論説誌『二〇世紀(Huszadik Század)』の復刊への布石として、同紙の主導権獲得を考えていた<sup>(106)</sup>。5月29日にセンデとこの件について話し合ったヤーシは、センデから思いとどまるようにと強く忠告された。だが、ヤーシは「これ[『ウィーン・ハンガリー新聞』の主導権獲得]なしには『二〇世紀』をほとんど運営できない」と日記に残している<sup>(107)</sup>。

### 3.2 主導権の獲得と親共産主義派の排除

1921年6月15日にヤーシは『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部でラーザール・イエネー、ブーザ・バルナ(Búza Barna)、ベレニ・ジェルジ、ガーボル・アンドル、ブローディ・ペーラ(Bródi Béla)と協議し、同紙の編集・経営などを一括して掌握することへの合意を獲得した。この日の彼の日記によれば「ほぼ完全な主導権を私[ヤーシ]に与えるという契約書が変更なしで署名された」<sup>(108)</sup>。

その直後にヤーシはカーロイに手紙を送り、獲得の事実を報告すると共に、カーロイの下で『ウィーン・ハンガリー新聞』の「精神的独裁(a szellemi diktatúra)」の採用、すなわち亡命者が主導して社会主義の精神(ただし共産主義は除くと考えられる)にもとづいてハンガリー国境外のハンガリー系住民に適切な影響を与える左翼組織へと成長することを期待する旨を記した<sup>(109)</sup>。この活動方針は、彼が直後の6月19日に『ウィーン・ハンガリー新聞』で発表した論説「ハンガリー人亡命者の課題」からも読み取れる<sup>(110)</sup>。彼は土地改革と共和制という「十月革命」の理念の継承、ハンガリーの政治・経済の「民主主義」化、新たな道徳の構築の必要性を訴え、継承諸国とハンガリーの「民主主義」的な世論をつなぐこと、国境外のハンガリー系住民が領土修正主義に陥らないように、彼らを「民主主義」的に発展させ、文化・文学の試みを助けることの二点を「亡命者の課題」と位置づけた。彼はこの改革を経てハンガリーが「経済的・政治的に民主主義化された」<sup>(111)</sup>ことによつてのみヨーロッパの中で居場所を得られると説いた。彼が考える亡命者の役割をより具体的に示したのが、同じく『ウィーン・ハンガリー新聞』で6月26日に掲載された論説「亡命者の祖国への『裏切り』」である<sup>(112)</sup>。彼はハンガリー国境外のハンガリー系住民の問題を重視し、ハンガリーが継承諸国と徹底的かつ豊かな経済的・文化的関係を構築すること、分断されたハン

(105) Litván, *Jászi Oszkár naplója* (前注16参照), p. 185.

(106) “53. Jászi Oszkár Károlyi Mihályhoz (Hrušov [Körtvélyes], 1921. május 1.),” in Hajdú Tibor, ed., *Károlyi Mihály levelezése II. 1921-1925* (Budapest: Akadémiai Kiadó, 1990), p. 104.

(107) Litván, *Jászi Oszkár naplója* (前注16参照), p. 192.

(108) *Ibid.*, p. 196.

(109) Jászi Oszkár, “Károlyi Mihályhoz (Wien, 1921. VI. 19),” in Litván György and Varga F. János, ed., *Jászi Oszkár válogatott levelei* (Budapest: Magvető Könyvkiadó, 1991), pp. 261-265.

(110) Jászi Oszkár, “A magyar emigráció feladatairól,” *BMU* (June 19, 1921), p. 1.

(111) *Ibid.*

(112) Jászi Oszkár, “Az emigráció ‘hazaárulása’,” *BMU* (June 26, 1921), p. 1.

ガリー人に対して、障害なく言語・文学・科学・芸術を育成・発展できるような強力な文化面での自治を保障すること、国境外に住むハンガリー系住民を「意識的・継続的・生産的活動」へと組織化させることの三点に最終的な目標を定めた<sup>(113)</sup>。すなわち、ヤーシは土地改革を通じたハンガリーの政治・経済の「民主主義」化とハンガリーの領土修正要求による周辺国との対立関係の解決を反革命体制打倒の意義だと考えて国境外のハンガリー系住民の役割を重視する一方、自分たち亡命者をこれらが実行されるための中核勢力に位置づけていた。彼にとって『ウィーン・ハンガリー新聞』はそのための結節点であった。

このようにヤーシが『ウィーン・ハンガリー新聞』の編集と経営の両方で主導権を獲得したのに対し、それまで同紙の編集を主導していたガーボルは8月に編集部を去り<sup>(114)</sup>、以後はランドレル派の共産党系新聞で執筆活動を続けた<sup>(115)</sup>。フランクらガーボルの同僚も相次いで編集部を離れた<sup>(116)</sup>。一方、ヤーシたちは「十月革命」の意義の列強への宣伝を強化し、それまで働きかけが不十分だった西欧列強の政治家や知識人を意識した活動も本格化させていく。また、ヤーシが『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部の主導権を獲得した後、彼の義弟で医師・文筆家のマジダル・ヨーゼフ (Magyar József) は同紙の読者を拡大する目的で継承諸国を度々訪れた<sup>(117)</sup>。これは編集部の政治的意図と経営の両面で重要であったと考えられる。

しかし、その後のハンガリーは1921年夏から翌年にかけてトリアノン条約の履行をめぐる問題を一旦は決着させ、1922年9月には国際連盟への加盟を承認されるなど、国際政治の舞台への復帰を進めた。これは、カーロイたち「十月革命」派による亡命政治活動が列強や周辺国の政府からは支持されていなかったことを意味した。また、『ウィーン・ハンガリー新聞』の経営状態はヤーシが経営の主導権を獲得した後も改善されず、1922年に入ると財政状況の悪化に度々直面した編集部員やカーロイたちが資金の工面に奔走することとなった。財政難に加え、編集部内ではヤーシ主導の編集体制の下で1922年に入るとラーザールの編集長の役割が更に形骸化した。1923年2月1日からは編集部を去ったラーザールに代わり、ヤーシが編集長となる。その後も同紙の財政難は続き、同紙は1923年12月16日付を以て発行を終えた。『ウィーン・ハンガリー新聞』の刊行停止後もカーロイを中心とする「十月革命」派の反ホルティ活動は続けられるが、同紙を主要な拠点としていた彼らは政治活動の面で大きな転換を迫られることとなった。

---

(113) *Ibid.*

(114) Litván, *Jászi Oszkár naplója* (前注16参照), p. 196.

(115) Frank, *Café Atlantis* (前注6参照), p. 106.

(116) *Ibid.*

(117) Vezér Erzsébet, “Emil Isac és a magyar progresszió: Levelezése Jászi Oszkárral,” *Korunk* 37, no. 8 (1978), p. 646.

## おわりに

本稿では、第一次世界大戦後の中央ヨーロッパの政治情勢がハンガリーでの1918-19年の一連の革命に携わった左派系の政治家や知識人の亡命政治活動に与えた影響について、『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部が1920年から1921年前半にかけての動向に注目して議論した。従来の研究では亡命した政治家や知識人内部の関係が注目されてきたが、本稿では当時の中央ヨーロッパの政治情勢という広い文脈の中に同紙を位置づけた。『ウィーン・ハンガリー新聞』編集部は1920年2月以降に親共産主義派のガーボルが主導して反ホルティ路線を明示した。同紙の編集部と所有者は分かれており、親共産主義的な編集部と距離を置こうとした所有者に代わって、ウィーンのハンガリー大使館の影響が疑われる人物が同紙の所有権を一時獲得し、同紙の編集方針に影響を及ぼそうとした。この際には、編集長のラーザールが反ホルティ路線を明示していなかった創刊当初から同紙に関わっていたことから、同紙編集部とハンガリー政府との関係を疑う者も現れた。そして、実際にウィーンのハンガリー大使館によるチェコスロヴァキアに対する政治工作の疑いは1920年秋に表面化した。チェコスロヴァキア、特にスロヴァキアでは、こうしたハンガリーからの政治的働きかけだけでなく、同地でのハンガリー系共産主義者の活動の拡大に対する警戒が高まっていた。1920年末に『ウィーン・ハンガリー新聞』が「ホルティ＝共産主義者の印刷物」として流通禁止処分を受けたのは、スロヴァキアでの共産主義の伸張とハンガリーからの領土修正要求に繋がる政治的働きかけへの脅威が複雑に絡まり合う状況の帰結だった。

この流通禁止処分を契機として、1921年6月に「十月革命」派のヤーシが『ウィーン・ハンガリー新聞』の主導権を編集と経営の両面で獲得し、編集部から親共産主義派を排除した。これは、ウィーンにおけるハンガリー系亡命者の一つの転機となった。当時、ハンガリーは権威主義的な政治体制の確立を進めながら国際政治の場に復帰を進めており、ヤーシたちは同紙を拠点に、共産主義でもなく、軍事的行使も辞さない当時のハンガリー政府のような領土修正主義でもない形で「十月革命」を共通項とした政治的独自性を訴える必要に迫られていた。

このように、1920年から1921年前半にかけて『ウィーン・ハンガリー新聞』が直面した様々な課題を整理すると、第一次世界大戦後の中央ヨーロッパでは、国境線という物理的な境界の変更が生み出した政治状況が、跨境的な存在でもあったハンガリー系亡命者を生んだ一方で、反ホルティという点では共通していた彼らの活動路線を分化させたことが分かる。このように、『ウィーン・ハンガリー新聞』を拠点としたハンガリー系亡命政治家や亡命知識人の活動を当時の国際情勢の文脈に位置づけることで、国境線という物理的な境界の変更が、ハンガリー語の言論空間は維持されながらもナショナリズムや共産主義を複雑に交錯させ、彼らの活動路線の違いを明確化させる結果につながったことが明らかとな

る。この成果は第一次世界大戦後の中央ヨーロッパの国境線の変化が政治情勢に与えた影響を複合的に考察する必要性を示唆している。

(付記)本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の研究成果の一部である。

